

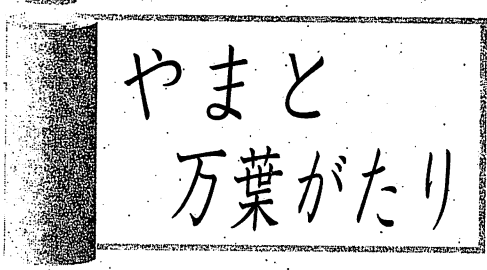
ぬばたまの 夜明かしも船は 漕ぎ行かな

三津の浜松 待ち恋ひぬらむ

作者未詳(巻十五・三七二)

『万葉集』巻十五に収められる208首の歌のうち前半の145首(三五七八〜三七二二番歌)には、736(天平8)年に朝鮮半島の新羅国へ遣わされた遣新羅使の人々が詠んだとされる「遣新羅使歌」がまとめられています。この歌群では、使節団がたどった航路に沿って歌が配列されます。「大伴の御津」と呼ばれた難波津を出

港して瀬戸内海を西進し、九州北岸を経て吉岐、対馬に至る往路部分には、次第に離れてゆくふるさとへの郷愁を基調とした多くの歌が収められます。続く復路部分では、外交使節として新羅での任務を終えて帰京の途についた一行が播磨国の家嶋(現在の兵庫県姫路市家島諸島付近)によろやく到達し、次第に近づいてくる懐かしいふ



るさとを目前にした際の思いが歌われます。今回紹介する歌は復路部分に配られています。夜通し船を漕いで行くという表現から、早く船旅を終えて出航地の難波津へたどり着き、その浜辺の松のように帰りを待つ人のもとへ一刻も早く到着したいという切実な思いが読み取れます。

【訳】ぬばたまのように暗い夜も休まず船を漕いで行こう。御津の浜松が待ち焦がれているだろう。

天平8年に出発した遣新羅使の航海は、必らずしも順調とは言えませんでしたが、往路では雪ユキで病没した使節員の東部沖で逆風に遭って漂流し、行程が大幅に遅れました。さらに、当時九州地方で流行し

ていた天然痘と推定される疫病に使節一行が次々と感染しました。吉岐で病没した使節員の雪宅ユキノカを見送る挽歌が往路部分に見え、往路時点ですでに使節団内に疫病が蔓延しつつあったことがわかります。

(県立万葉文化館主任 研究員・竹内亮)

|| 次回は1月11日

ます。復路に寄港した対馬では大使の阿倍継麻呂アベノツグマロが亡くなり、副使の大伴三中也オホトモノサカも感染のため帰京が遅れました。このような苦難に満ちた旅路の末に、生きて